奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「吃音症と私」

山北町立山北中学校　３年　馬場（ばば）　紗季（さき）

私は、吃音症という障害を持っています。吃音症とは、話し出すときに言葉がつまったり、言葉がすらすらと出てこない発話障害の一つです。

吃音症と戦っている人は日本に百二十万人、百人に一人の割合でいるといわれています。

吃音は二〜三歳の幼児期に発症し、多くの人は自然に治癒していきます。しかし、二〜三割の人は症状が固定してしまい吃音とともに過ごしていかなければなりません。

世の中には、吃音症を笑われたり、からかわれたりしている人がおり、生きづらい思いをしている人がたくさんいます。

私は、六歳のときに吃音を発症しました。吃音症という障害をもっているので学校生活や私生活でも困り、悩んでしまうこともたくさんありました。

授業で発表するときなどはもちろん、友だちと話すとき、家族で話すときでさえ上手く言葉が出てこない自分が本当に恥ずかしく、自分自身が大嫌いでした。

小学生のとき仲の良い一人の子と話をしていました。別の子が近づいてきた瞬間、吃音症の症状がでてしまいました。

「なにそのしゃべり方。変なの。」

その子は私のしゃべり方を真似してからかってきました。

その子はいじめるとかではなく軽い感じで言ったようでした。しかし、私は「私って変なんだ、」「他の子とは違うんだ」と思い、話をすることが減っていきました。

口数が減り、友だちと話すことも減り、とうとう学校を休むようになってしまいました。

そんなとき、父や先生が紹介してくれたのが「ことばの教室」という場所です。

「ことばの教室」とは、発話や発音、言葉を使ったコミュニケーションに悩みがある子が通う場所です。

そのときの私にとって「ことばの教室」は唯一、自分の想いに素直になれる場所でした。

私は、三年間通っていたので、三人の先生にお世話になりました。どの先生も私が話し終えるまで待ってくださり、過ごしやすい空間を作ってくださる最高の先生たちでした。

そこでは吃音症についても詳しく教えてくださいました。その中で心に残っていることが三つあります。

一つ目は、吃音は自分がもっている個性だということ。

二つ目は、吃音は恥ずかしいことではないということ。

三つ目は、吃音症で悩んでいる人は自分だけではないということ。

この三つを教わって、吃音症に対する悩みがゼロになった訳ではないのですが、少し気持ちが楽になったことを覚えています。

「ことばの教室」では年に一回ほど吃音症をもっていながら社会で活躍している人と話す機会がありました。

吃音症をもっていながらも、学校の先生をやっていたり、接客業のアルバイトをしていたり様々な仕事をしている人と話すことができました。私にとっては驚くことばかりでした。

「吃音があるからってできないことはないんだよ。なんなら他の人と別のものをもっているんだよ。」

私にはなんでそんなに前向きにいられるのかわかりませんでした。しかし、別れ際に言われた言葉に、私は涙が止まりませんでした。「吃音は自分しだいでどんな形にもなる。形を変えるかは自分しだいだよ。」

今までの私は「吃音だから」と吃音症のせいにしていました。しかし、本当に自分を悩ませているものは、自分自身なのだと気づかされたのです。

私は将来、吃音症がより多くの人に理解してもらえる活動に取り組みたいと思います。吃音症をもっていても差別されず、過ごしやすい、生きやすい社会を作っていきたいと思います。

私の思い描く社会の形を目指して。